

特技懇の活動に思うこと

巻・頭・言

特許庁技術懇話会 代表委員 渡辺 仁



最近の審査室をのぞいてみると、やや単調で、モノトーンな印象を受けるのは、私だけでしょうか。審査室の席の配置が統一になったからだろうか、審査官の気質が変わったからなのか、あるいは、審査官に対する社会的な要請が変わったことによるものだろうか、などと漠然と考えていました。そして、それと同時に、審査の仕事が洗練されて、無駄がなくなってきたというポジティブな印象だけではないものを、このモノトーンな印象を受ける最近の審査室の雰囲気から、感じていました。

審査のやり方は大きく変わってきていますが、審査の仕事の本質は変わっていないと思います。プロジェクト型の仕事とは違い、審査の仕事は、短距離を走るように息を詰めたままゴールを目指して一気に走りきるようなわけにはいきません。むしろ、審査の仕事は、ゴールがはるか彼方にあるマラソンを最後まで走りきるように、コースの起伏にあわせて走り方を工夫しながら、1件1件の審査を積み上げていく仕事であると思います。私がモノトーンな印象を受ける審査室の雰囲気は、審査に全力投球する審査官の姿が、まるで、短距離走を繰り返しているように感じられるからではないかと思うようになりました。

仕事をする上での時間の使い方の工夫として、仕事にアクセントを付けるということがあります。仕事のアクセントの一つとして、仕事に「オンでもオフでもない時間」を確保して、メリハリを付けるということがあると思います。仕事にとっての、「オンでもオフでもない時間」とは、オンの状態が目前の業務を全力で処理する時間であるとすれば、目前の業務の処理とは直接関係はないものの、問題解決の近道を見つけるためのニュートラルな時間であると思います。

私は、特技懇の代表委員に就任して、まず、特技懇の活動を会員の仕事の中でどのように位置づけていけばよいのかを考えました。そして、様々な経験や知識を持つ会員か

らなる特技懇であればこそ、その活動を通じて、会員にこのニュートラルな時間を提供し、仕事のアクセントを付けることができるのではないかと考えています。

特許庁技術懇話会は、「会員相互の親睦と研さんならびに地位の向上をはかりあわせて特許行政に寄与し科学技術の振興をはかること」を目的として掲げ、70有余年の伝統を持つ集まりです。そして、今年度も新会員100名を迎え、特別会員を含め総勢3000名近くを抱える堂々たる組織であり、主たる事業として、会報であるこの「特技懇」誌を定期的に刊行し、関係各位から高い評価をいただいております。

特技懇は、同じ目的の下に参集したメンバーの自由な集まりです。そして、現在、このような同好の士の集まりにとっては、その運営が難しい時代を迎えているといわれています。明確な目的意識を持っている特技懇を、目的のはっきりしない緩やかな集まりと同列視することは適当ではないかもしれません。しかし、特技懇の活動自体は会員を拘束するような性質のものではありませんから、その目的をはっきりと活動に反映させていかないと、存続が困難になっている同好の士の集まりと同様な課題を抱えるようになっても不思議ではありません。その意味からも、今年度は、特技懇の掲げる目的に立ち返り、「会員のために、今、特技懇は何ができるのか」を軸として、時代の要請に合致した活動を展開していきたいと考えています。そうした活動の中にあつて、会員一人一人が、特技懇の存在意義を再確認し、「自分にとっての特技懇とは何か」を改めて認識するきっかけにさせていただけたらと考えています。

そして、特技懇の活動が、その今日的な意義を認識した会員による自発的な参画によって、より一層充実し、会員にとって日々の仕事のアクセントとして役立つよう願ってやみません。